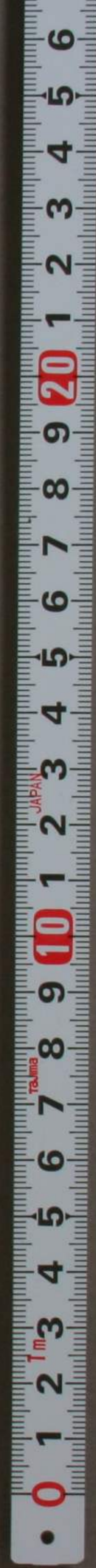
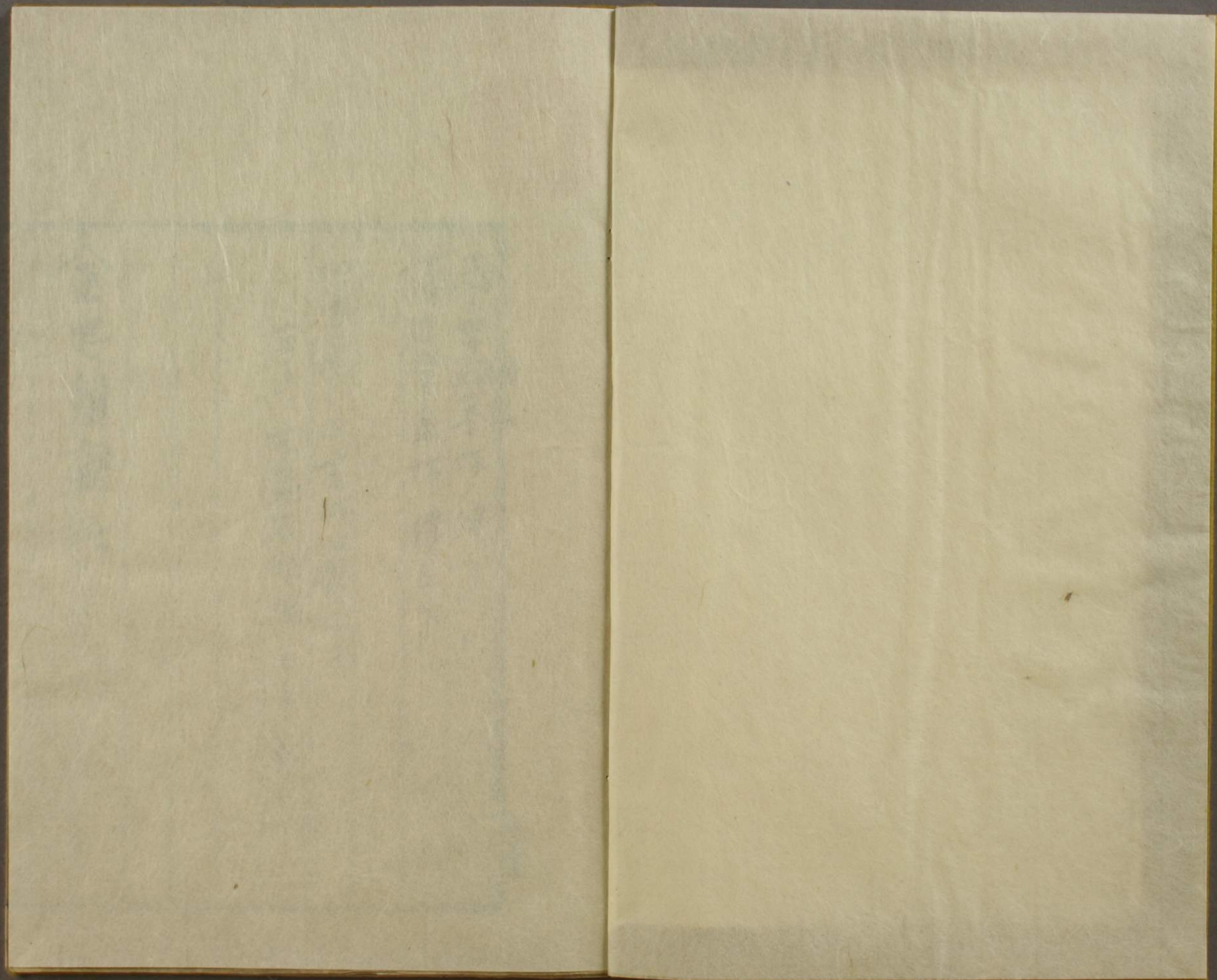


洋学文庫
文庫8
A 312







南之肇羽綱紀奉作ノ傳アリ
南生童童奉作ノ傳モアリ

仙臺國分所書林伊勢安三

金三ノ書筋石板摺ノモノヲ喜ル

金忠輔雜話

友部鐵軒先生梧下
 菅夏中天神社内へ拙者門人金忠輔相立候石
 碑の儀に付此度拙者へ御尋の趣承知仕透

仙石
 奥羽三芳明也吾三月廿五

金忠輔氏此事蹟に就て

在東京 蘆洲若林 彪
 金忠輔氏の政宗公以来の奇傑たることは近頃漸く世人の知る所となれり然れども其踐歴の詳細に至ては多く世に知る人なし有志の深く遺憾とする所なり獨に仙臺の飯川勘氏忠輔氏の事蹟蒐輯に従事せるを聞く余深く忠輔氏の爲に其知己者を得たるを喜ひたり其後今に至りて其傳記の世に出てさるは或は飯川氏の其事の茫邈にして到底蒐輯に功なきを以て之を中止せしには非ざる歟余因て不肖を搢らす金忠輔氏詳傳を著すを以て自ら任じ爾來其蒐輯に従事する者數月未だ好結果を見ず仙臺八塚阿

彌陀寺に藩の文學櫻田周輔なる者の碑石あり周輔名は質字は仲文虎門城隍子と號す又欽齋と稱す安永三年申午四月廿三日を以て生れ天保十年巳亥十月三日行年六十六歳にて歿す世に傳ふる所忠輔は周輔氏の門人なりと余故を以て之が事實を確めんと欲し若索月餘未だ其端緒を獲ず矣此頃祖父靖亭翁の記録中より圖らざりき左の事蹟を得たり感慕措かず寫して鐵軒先生の梧下に呈す思ふに鐵軒亦奇傑の士而して尤も歴史談に長ず固より同病相憐むの人必ずや奥羽新聞の一隅を割愛して之を世に紹介するに吝ならざるなり

明治廿二年二月尽 若林 彪拜
 友部鐵軒先生梧下
 菅夏中天神社内へ拙者門人金忠輔相立候石
 碑の儀に付此度拙者へ御尋の趣承知仕透

一左之通御答申上候

一右石碑相立候儀右忠輔と拙者申合候儀哉の譯御尋の趣承知仕候右申合相立候儀には無御座候乍去右石碑相立申度作文の義拙者へ同人より相頼候節右相立譯承届候間此段も申達し置候右は近來程朱の學風衰微仕候に付同門の輩兼て厚く交り候者共にも心違候而學問の第一義取失ひ候儀の義追々有之に付此以後右の義屹度取失ひ申間敷段堅く誓約の面々名前石碑へ彫付差置方一右誓約の趣相違候節は右仲間併に懲戒の爲右碑而姓名をも相削候儀仕度右之赴作文仕吳候様申聞無餘儀事と奉存右之赴作文仕候尙又右學問の第一義と申義等は物而碑文の趣にて相知れ申義にて御座候尤も右人數名前一統石碑へ彫付申等にて右人數の内抜き差の義吟味懸り有之近來迄延引仕候處漸く相

形付此節彫方相全候由に御座候

一右忠輔身分等委細申達候儀被仰渡承知仕候出入司支配御番外金義三郎と申者之次男にて拙者門人に御座候
一右碑文和解早速差出候様被仰渡承知仕別紙一册差出申候
一右石碑表の方他國の者姓名有之候處右の者何方御家中等の譯申達候様被仰渡承知仕候右之段承紀候處松平阿波守様御家中集堂弓五郎と申者秋月山城守様御家中大塚太一郎と申者右兩人にて右何れも先年儒官相勤近來は他役に相成候由承知仕候 (未完)

申合候義等有之譯には相聞得不申右前文申上候面々申合候第一義追日に至り相違不相違等之分別相決候義兼て信仰仕候者の定説に無之候而は右仲間名前相除候節不快に有之其節に至り彼是爭論等相成候而は何時迄も相決兼候様の事難計御座候に付其節拙者並に右他國のもの兩人の輩定説を以て決定可仕申合爲其石碑表へ拙者名元一同彫付置候由忠輔兼て申聞候間此段も申達候
右之通御座候以上

(別紙)

彪曰く左記辞句毎に一々和解多れども其煩を避けて今唯本文のみを載す他日忠輔氏傳記を公にするの日は併せて之を録すべし

十一月十一日 櫻田 周輔

此度天神社内へ相立候碑文和解仕差出候様被仰渡承知仕左の通相認め差出申候
結社誓辞
道學日衰 名節不競 妾婦是效 以順爲正 有
觀面目 猶曰由堅 假名濟欲 無義無論 人莫
克辨 亦以安富 鮑魚在肆 群蠅逐臭 念我獨
分 反經率舊 斧鉞不成 豈願文繡 寧自今矣
先民存作 漢傳黨錮 宋稱僞學 世殊迹異 厥
揆如約 或裁厥躬 遺烈彰灼 嗟二三子 麗澤
相摩 禮進義退 遵孝金科 誓爲兄弟 之死靡
他 爰勒磐石 庶幾匪磨 或淪斯盟 維神有靈
降罰不赦 發聞惟腥 吾徒鳴鼓 有辭莫聽 其
唾爾面 其別爾銘 (和解略す)

文化九年壬申正月 櫻田實還並書
右之通御座候以上
十一月 櫻田 周輔

假名

彪曰く阿彌陀寺周輔の墓に左の文字あり文中一語の忠輔等の事に及ぶものかし蓋し諱む處ある歟暫く録して後考を待つ人この結社誓辭の碑石を建てしは蓋し忠輔氏國を脱するの前者なるべし

江都故麴溪書院助教 安永三年甲午

本藩文學 四月廿三日生

櫻田周輔名質字仲文墓 天保十年己亥

自號虎門鼓缶子 十月三日卒行

僧證至誠院天阿常樂居士年六十六

鼓缶子。既撰文學。歸藩數年。視世風日降。士乏廉節。竊慨焉。乃與同志誓。勒其辭于石。樹之城東。普公祠左。以相砥礪。時會藩方改學制。增廣儒員。任事者。病其嫌於誇已。屢使人諷仆其碑。不聽。於是宰執。命其地主除之。鼓缶子。因移置

之于八塚阿彌陀寺。後十餘年。遂彫其陰。以為壽藏碑。而猶不敢刪其辭者。乃自表所藏之志也。文政癸未正月 鼓缶子自記

手記
其一二
其一二
其一二

中書ニハ...

...

...

...

...

...

...

...

...

◎金忠輔先生の逸事(二)

梅莊老人 養 酒

欽齋櫻田翁、百騎丁東二より櫻小路へ轉宅の際門弟中より手傳として人夫を遣はせしに忠輔先生は自ら手傳に來り帶刀の儘車を挽しを北目町にて町奉行に見認められ藩士にして荷物杯を自運搬するは士分に似合ざる所爲ありと咎められしに先生傲然として曰く今日は師櫻田翁の轉宅あれば門弟中何れも人を貸して手傳せしも拙者は冷飯藩士の二三貧窮あるを以て意の如くならず去迎之を座視するは師弟の道に非ず依て自身家財の運搬に從事せし者にて君等の如き飽食暖衣にして師弟の道を辨知せざる者の敢て提督(干渉)する處にあらずと大く嘲弄したりと然れ共藩に制掟ありて諸藩士の自ら車を挽が如きは堅く禁する所あるを以て評定所に召喚せられ一應取調の上役向に對し嘲弄せしは不都合ありとて七日間の謹慎を命ぜられしと其放膽概ね如此

◎金忠輔先生の逸事(三)梅莊老人菱沼
一日荒町齋齋商の雇人某來て先生に擊劍の指
南を乞ふ。先生の商法にして武道の心掛あ
るを賞し快く承諾して曰く汝は商法の身かれ
ば修業に年月を費すと能はざるべし依て一日
にして新陰流の極秘を授くべし日を卜して來
れと某大に喜び翌早朝に來る先生之を裏畑に
誘ひ行き大喝して曰く昇平の日商賈にして劍
を學ぶもの強盜若くは長脇指の博奕者流とあ
るの目的のみいで國家の爲一刀に擊果し與ん
と殺刀にて追ひ駈られ某喫驚狼狽を繞て逃
出すを汝逃しはせじと大音聲に呼はりく屋
敷中を三四回追廻はしたる後、刀を鞘に収め
某を慰撫して曰く、先つこれにて劍道熟練と
心得べし能は若し事あらば今日の如く逃走す
へし決して劍難に罹るとおし、是即ち新陰流
の極秘ありと某流汗淋漓拜謝して退く。○上

梅莊老人菱沼
荒町齋齋商の雇人某來て先生に擊劍の指南を乞ふ。先生の商法にして武道の心掛あるを賞し快く承諾して曰く汝は商法の身かれば修業に年月を費すと能はざるべし依て一日にして新陰流の極秘を授くべし日を卜して來れと某大に喜び翌早朝に來る先生之を裏畑に誘ひ行き大喝して曰く昇平の日商賈にして劍を學ぶもの強盜若くは長脇指の博奕者流とあるの目的のみいで國家の爲一刀に擊果し與んと殺刀にて追ひ駈られ某喫驚狼狽を繞て逃出すを汝逃しはせじと大音聲に呼はりく屋敷中を三四回追廻はしたる後、刀を鞘に収め某を慰撫して曰く、先つこれにて劍道熟練と心得べし能は若し事あらば今日の如く逃走すへし決して劍難に罹るとおし、是即ち新陰流の極秘ありと某流汗淋漓拜謝して退く。○上

◎金忠輔先生の逸事(四)梅莊老人菱沼
先生赤貧骨を刺すばかり帶刀の身を賣り竹筥
を鞘に収めて狭み意氣揚々たり曾て深更に小
田原を過る老杉鬱々四邊頗る淋し(今の東六
番丁小學校敷地の所)覆面の賊あり突然林中
より出で先生を撃たんとす先生熟視人に驚き
愴惶徒跳にて逸走り、翌例の如く武道の師
狭川氏の道場に至る狭川氏先生を見て曰ふ汝
の面色甚だ悪し何ぞ恐ろしきとに出逢ざりし
や、先生答て曰く忠輔は天地間に恐るゝ者御
座らぬ大言例の如く昨夜のとは少しも語らず
其翌日又問ふ汝の面色當らざる盜賊に會ひし
からんと先生曰ふ忠輔をどは賊を見る蛆虫の
如し二千ヤ三千の草賊に恐れて可からんや大
言益す甚だし狭川氏笑て曰く其程の豪傑にて
あせ一昨夜一人の賊に逢ふて徒跳にて逃げし
や、先生掌を拍て笑て曰くうの事あり彼時拙
者珍らしき獲物あり捕擗くれんと賊を見しに
豈圖らんや誠に扮せしは大先生あり先生を捕

推くは弟子の道に非ずと思ひ爲と逸走しなり
狭川氏曰ふろは偽あり汝の見秘あるべし先生
大に笑て曰く今の世燕飛の構ひ(新陰流の極
秘)を悉すもの笥柄(同流の刀法)の刀を帯る
もの大先生の外になし忠輔豈見紛はんやと、
狭川氏其愴惶の際猶能く注意を加ふるの膽氣
を賞して刀一腰を與へしといふ、蓋し狭川氏
先師の竹光を知りて之を試みしなり。○上

梅莊老人菱沼
荒町齋齋商の雇人某來て先生に擊劍の指南を乞ふ。先生の商法にして武道の心掛あるを賞し快く承諾して曰く汝は商法の身かれば修業に年月を費すと能はざるべし依て一日にして新陰流の極秘を授くべし日を卜して來れと某大に喜び翌早朝に來る先生之を裏畑に誘ひ行き大喝して曰く昇平の日商賈にして劍を學ぶもの強盜若くは長脇指の博奕者流とあるの目的のみいで國家の爲一刀に擊果し與んと殺刀にて追ひ駈られ某喫驚狼狽を繞て逃出すを汝逃しはせじと大音聲に呼はりく屋敷中を三四回追廻はしたる後、刀を鞘に収め某を慰撫して曰く、先つこれにて劍道熟練と心得べし能は若し事あらば今日の如く逃走すへし決して劍難に罹るとおし、是即ち新陰流の極秘ありと某流汗淋漓拜謝して退く。○上

◎金忠輔先生の逸事(五)梅莊老人菱沼
先生或夜同輩數人と四方山の話の末荒町見沙
門社内より運坊小路へ出る法壽寺裏樂塔塔場に
夜あゝ化物出で人を惱ます故今は往來する
者なき由話す者ありしに先生大に笑ひ我得て
退治し吳んと高言を吐きしが其後先生深沼へ
魚漁に行きたる歸るさ深更にありければ此時
社と持綱竿へ二ヶの籠を結びつけて肩にかけ
腰にも一ヶの籠を下けたるまゝ、悠々と墓地を
通りしに石塔の上に生首三級ありて荒爾と笑
ひ居る故先生ツカカゝと進み寄るに一級忽ち
飛來りて前肩を咬む故直に取て投付ると又一
級飛來りて後肩に咬みつく是亦取て投げ付る
中残りたる一級は腰に咬み付たり先生之をも
シタ、カに投げつけ大手を振て歸りしが見れ
ば肩に擔きたる二ヶの籠と腰ある一ヶの籠と
は魚を入れたるまゝ、無し、流石の金先生も少
時呆然たりしと。○上

梅莊老人菱沼
先生或夜同輩數人と四方山の話の末荒町見沙門社内より運坊小路へ出る法壽寺裏樂塔塔場に夜あゝ化物出で人を惱ます故今は往來する者なき由話す者ありしに先生大に笑ひ我得て退治し吳んと高言を吐きしが其後先生深沼へ魚漁に行きたる歸るさ深更にありければ此時社と持綱竿へ二ヶの籠を結びつけて肩にかけ腰にも一ヶの籠を下けたるまゝ、悠々と墓地を通りしに石塔の上に生首三級ありて荒爾と笑ひ居る故先生ツカカゝと進み寄るに一級忽ち飛來りて前肩を咬む故直に取て投付ると又一級飛來りて後肩に咬みつく是亦取て投げ付る中残りたる一級は腰に咬み付たり先生之をもシタ、カに投げつけ大手を振て歸りしが見れば肩に擔きたる二ヶの籠と腰ある一ヶの籠とは魚を入れたるまゝ、無し、流石の金先生も少時呆然たりしと。○上

◎金忠輔先生の逸事(五) 梅莊老人菱沼先生。大立目克明(通稱鉄右衛門守拙園)と號し欽齋翁の高弟あり。及狹川將長(通稱新之丞新陰流の達人新三郎將義の業を継ぎ伊達家の師範役とある)と無二の學友たり。三人鼎坐して種々雑話の末先生曰ふ假令武文の兩道に達するも心膽を練るに非ざれば緩急事に應じ難し抑練體の備たる種々ありと雖も深夜寂寥無人の境に靜坐するをよしとせと兩人大に之を然りとし其夜丑の時より此術を始むるといふ大立目氏は山居澤に狹川 樊山に先生は伊勢堂山に於て靜座すると定め翌朝に至り再び會合して各前夜の狀を述るとを約し毎日其靜座に場所を交換し殆んど旬餘に及びしといふ或時他の學友大立目氏の許に來り近頃貴殿靜座を創めらしと微かに聞しが同志は誰々ありやといふ大立目氏は拙者と金、狹川の三名ありと答へしに其人不審の色を規はして曰く拙者一昨夜と昨夜金氏に面晤すべき所用ありて宅

を訪ひしに雨夜とも宅にて安眠し居られたり貴殿等例の曠着手段にのり玩升せらるゝにはあらずやと是に於いて大立目狹川の兩人は始めて先生に瞞着せられし事を曉り大に怒りて絶交の書面を送りしに先生の返翰に曰く絶交の義敬承せり然れ共今後過を改むるあらば是迄の如く交際あらん事を懸ふ云々、此書翰今尙は傳へて克明の孫大立目克階氏の家に藏しありといふ、蓋し先生の眼中殆ど人なきが如く他日絶代の雄圖を狭み、千古の偉業を企劃せしもの這般粗放濶大の氣象に基きたるを見るに足るべし、**コトウツク**

◎金忠輔先生の逸事(七) 梅莊老人菱沼先生傲岸孤峭權貴を懼らず勢威に屈せず落落たる胸懷人をして畏懼敬崇せしむるに足るものありと雖も而も往々にして統袴子業を漫罵し凌辱し大言放語以て自ら快とするあり先生の狹川氏の武術警古所(今の東一番丁木村

主達ハ主立ナリ生徒ノ首座ヲ占ナラ取教ノ如キモノ

達氏の邸の邊り)に通ふや同門中に門閥家の子息某あり(氏名は憚りありて記さず) 勢威頗る高く門生何れも媚を獻じて其歡心を沾ふ様殊に醜くし先生之を不満に思ひ或日面の方に某を罵て曰く足下の如き飽食暖衣徒らに門閥の威を負ふて一能事なくも大祿を貪り乍ら些の氣骨を有せざるもの。緩急毫も君國の爲に益する所あけん祿盗入とは足下の如き者をいふと威丈高に成て大聲せしかば某大に怒り血相變て刀に手をかけたり先生嗔然放笑して曰く斬るか面白し足下の如き憶病武士が此忠輔に斬てかゝる蟬螂の禮車に向ふが如し面白し、併し乍ら直に斬らんとあらば父母に訣別して來るべし又忠輔と眞勝勝負の儀を先生に申し出づべしさて其後冥土へ旅立ち玉へと嘲笑益々甚しかりしとあり。蓋し先生は貧乏藩士の次男にて某は門閥家の子息あれば果し合等の事万々之無を始より合點し居りたるあり、**コトウツク**

◎金忠輔先生の逸事 梅莊老人菱沼文政年間新陰流の劍道師前狹川氏の門弟一同青葉城柳の間に於て擊劔試合を藩主の上覽に供せんとて内警古晝夜修練の際獨り先生のみ一切出席せず狹川氏始一同不審に思ひ主達をして先生に問はしむ先生曰試合に於て吾と匹敵の者なし故に上覽には出でざる覺悟あり但し狹川清治(新陰流打太刀の家にて有名ある達人)との組合あらば出席すべしと主達其放言に驚き其儘復命す狹川氏考一考して曰く善し彼の望に任すべしと是に於て先生も出席するるとありしが金氏と狹川氏とは伎倆天地の相違あるを以て人皆之を奇とし上覽の當日は拜見の衆立錫の餘地を以て呼聲に應じて東より金忠輔、西より狹川清治、肅々として出で清治は中晴眼に金は下段に構ふ半にして金は御座の間に向て進む清治其意外に心奪れ茫然たる折しも金は大喝一聲跳きて狹川の頭上を撃つ初太刀の勝を得。次の試合に至り

清治憤怒の血相を帯て屹立す。金は平氣にて太刀を八相（上段に冠る）に冠り跳込が如くにして仰向に轉倒す清治得たりと討込むを金は隻手にて其右腕を撃て二番勝を得、最後の試合には金態と太刀を背にし頭を清治の面前に出して撃たせたる様故らに勝を譲りたるが如し其機智を以て人を敬ふと概ね如此蓋し新陰流は禮讓頗る嚴肅にして轉倒せしものを撃つが如き事をし清治有名ある達人あるにも似ず初太刀の敗に憤懣して却て先生の策に陥りしは終生の誤りありと知る人は評し合へりと

〇金忠輔先生の逸事（八の續き）
梅莊老人 菱沼

先生は矢内と共に桑折驛に至り里正某常に私利を計りて富める者あるが此時別荘を新築して今や棟上の式を行ふ時ありしかば先生は此邊を頻りに徘徊せしに里正は怪やしとや認めけん其故を問ふに先生答へず里正益々怪み問ふ及び先生曰く此新築家相甚悪し故に氣の毒と思ひ徘徊せしありと里正大に憂ひ先生に乞ひて家相の惡運を直さんとし百方願ふて止まざるより先生蠶目の術ありとて弓矢を帶し何やら誦みくれし其夜は大に里正の馳走を受けて一泊したりと是又例の無銭旅行の顯著手段ありしあるべし

〇金忠輔先生の逸事（八の續き）
梅莊老人 菱沼
先生は矢内と共に桑折驛に至り里正某常に私利を計りて富める者あるが此時別荘を新築して今や棟上の式を行ふ時ありしかば先生は此邊を頻りに徘徊せしに里正は怪やしとや認めけん其故を問ふに先生答へず里正益々怪み問ふ及び先生曰く此新築家相甚悪し故に氣の毒と思ひ徘徊せしありと里正大に憂ひ先生に乞ひて家相の惡運を直さんとし百方願ふて止まざるより先生蠶目の術ありとて弓矢を帶し何やら誦みくれし其夜は大に里正の馳走を受けて一泊したりと是又例の無銭旅行の顯著手段ありしあるべし

〇金忠輔先生の逸事（八の續き）

梅莊老人 菱沼

未完

後十部本家 御前御下 御下御下

Table with 10 vertical columns and 1 horizontal line at the top.

仙臺北日報廿五年 御下御下 御下御下

夫

頃者熊阪適山の隨筆を讀む中云へるあり曰く「去年(天保六年)六月、奥州石巻港の漁史、安南國より歸る、右漁夫等は洋上にて暴風に遇ひ、漂流して遂に安南に至れる者あり、其者等の説に據れば、目下同國にては、戦乱最中にて、日本仙臺の士某、一方の大將とあり居り、と、按ざるに其士は十餘年前松前に居り、其後去て安南に赴きたる、仙臺の士なるべし、惜むらくは今其名を記臆せ、と、漁史案をみるに忠輔が松前より歸り、石港

に於て其叔父と訣別し、飄然輕舟に駕して南駛
せるは文政中もあり、今其時代を推較するに仙
臺の士ある者、其忠輔なるや疑を容れず、恨むら
くは其石港を去るの後、何より由て安南國に至り
しやを知る能はざるを、

櫻田欽齋は忠輔の師なり、欽齋の江戸より帰る
や、督學大槻平泉と隙あり、忠輔等之を憤り、師の
為に壽碑を城東天神祠内に樹て、大に之を譏る、
藩儒田邊匡敷等侯より白して其碑を仆さしむ、欽
齋可かむ、故に藩人を差して之を殪す、欽齋已む

を得ず、碑をハツ塚阿彌陀寺の塋域に移して壽
藏碑となす、今現に存す、今茲二十一日欽齋の遠
孫等相議して祭典を同寺に設くと、若し夫れ往
吊するの士、其碑背を撫して東奥の英雄を追懷
する、亦以て品紫評紅の鎖興に増す者あらん、

Blank page with faint vertical lines, likely bleed-through from the reverse side.

台原東北日報 五月五日 午前九時 自奥の山方 十三百十八

金忠輔静坐の約を背きて絶交せらる

金忠輔、壮として櫻田修輔の門に遊ぶ、同学大立目、鐵右衛門と、暗夜幽寂の地に往きて静坐練心の術を修せんことを約し、闇を探りて往く所の地を撰む、大立目は、両足山を得、忠輔は、磐神山を得たり、翌朝に至り、大立目、忠輔を訪ふて、頻りに両足山幽寂の状を語る、忠輔首肯して曰はく、「両足山の有様もソコナものだと、然れども忠輔實は約を背きて往かず、家内に熟眠せりなり、大立目られを聴き、大に怒りて、忠輔と絶つ。」

山に遊んで大に然るに其の勢に
其の勢に大に然るに其の勢に
其の勢に大に然るに其の勢に
其の勢に大に然るに其の勢に
其の勢に大に然るに其の勢に
其の勢に大に然るに其の勢に
其の勢に大に然るに其の勢に
其の勢に大に然るに其の勢に
其の勢に大に然るに其の勢に
其の勢に大に然るに其の勢に

金忠輔の事歴

仙臺東北日報の伝は五十九百五十九
或は向奥の史のつる百十九

忠輔は栗原郡東山に生る仙臺藩臣金義三郎の
嫡子なり幼よりして穎悟嬉戯兒童と伍するを好
まむを好んで大人長者に知を求め書を讀み武を
修め天下を横行して大業を建立するの志氣あ
り區々家を継ぐを欲せず此に於て義三郎他人
の子を養ふて嗣となし忠輔をして其所志を行
はしむ忠輔遊歴を好み屢々仙臺に來て知人の
家より食客たり然れども猶文武の研修急らむ新
蔭流の劍術狭川新三郎より長沼流の兵法を片平

且子學ひ皆其蘊奧を極め又櫻田欽齋翁は從て
經義を聴き性命道體の理に通し最も中庸を精
しく文字訓詁尋章摘句を事とせ先平日の行狀
磊落奇偉概ね常情の外に出て他人の是非を顧
み先文政某年突然仙臺を去り其往く所を知ら
ず先是幕府意を蝦夷地に注ぎ其着手の始めと
して松前侯の蝦夷地管轄を罷め之を奥州梁川
一万石に封し蝦夷地全部を幕府の直轄と為せ
志輔命下るを聞き蹶起して曰く是天下安危の
関する所大丈夫豈は之を黙視をべけんやと直

に發して江都に赴く松前侯既し蝦夷地を失ひ
怏々として樂まぬ日夜其復封を望む而も計出
す所なし偶志輔を侯に薦むる者あり乃召見て
謀を諮ふ志輔曰く臣が力能く之を成さんと密
約を訂して去る尚此時沼津侯水野出羽守閣老
御勝手掛たり威焰顯赫改治概ね其手に出つ水
野の臣土方縫殿助才幹あり吏務に達し威望往
往主を凌ぎ道路目を側つ遂に京童をして土方
縫殿助家来水野出羽守を誑はしむるに至る志
輔姓名を変して土方の僕となり晨昏奉仕謹慤

人子過く土方頗る之を愛む一日藩邸内の講武
所に至り少壮子弟の擊劍を見るに其技皆極め
て拙なり忠輔大に笑ふ子弟怒て曰く賤僕無状
撃て之を殺さんと強て場に入れ共ニ技を較へ
んを迫り辞謝百般を以ても聽さず忠輔已む
て之を得ず竹刀を執て仕合を為此に衆壯士皆其
刀下ニ伏し一人も能く敵たり者なし忠輔後難
を恐れ急ぎ走て家ニ歸り縫殿助に告ぐるに故
を以てし且曰く奴恐くは免れざらむ主公願く
は之を救へと縫殿助之を奇として外出を戒め

技擢して小姓とあし漸く親近せらる
縫殿助既ニ忠輔を親近し常ニ公用文書の調査
を命じ之に意見を附せしむるに其所見人より
高きと數等議論觀るべきもの多し縫殿益之を
信任し遂ニ國家の密事をも談ずるに至る一日
縫殿忠輔に語て曰く公儀に於ては目今松前及
び蝦夷地の處置に窮せられ日夜憂念措く能は
ず該地直轄以來徒らに虚費多くして天下の實
益となるに少なきが故なり忠輔從容として曰
く此ヲ處置する事甚だ容易なり何ぞ苦しむ

玉ふと此の如き、縫殿曰く汝の説如何忠輔曰く
唯松前侯を復封土着せしむべきのこ、松前侯を
して蝦夷地を支配せしむる時は徒費なくして
貢賦を收納するを得蝦夷亦松前旧来の恩を頂
き心服して叛くことなし是實に百利あつて一害
なき萬全の法なりと其言鑿々肯綮に中る、縫殿
之を是とし主侯は告く侯も亦之を然りとし、松
前氏を旧封に復し蝦夷地一圓を領せしむるを
本の如し、無幾忠輔突然縫殿の家を去り其所在
を知ることもなく於之縫殿始めて忠輔は松前の間

者ありして己を謀りし者あるを察し深く其密
事を漏らしたるを悔み其往く所を窮めんとし
特に其仙臺松前の兩地を嚴密に探索すると雖
も遂に其踪跡を知る能はず、
却説忠輔は縫殿助の家を脱してより急行松前
に赴き侯に謁し、侯厚く其の勞をねぎらひ而
て欲する所を問ふ、忠輔曰く蝦夷全道を巡視す
るを得は足れりと、侯乃ち導者を附して之を
遣る往て札幌の廣野に至り其所在を失ふ或は
云ふ魯西亜に入ると或は云ふ米利堅に入ると、

後年漁船の漂流して満州に至りし者あり帰りて人より語て曰く満州地方は於て一國の王は見えしとあり其時王自ら吾は日本國仙臺の金忠輔と云ふ者なりと名乗り本國の有様を問ひ種種の賜はり物ありて返されしと由是觀之忠輔は札幌より満州に渡り遂に一國の王たるを得て平生の大志は酬るしものなるべし山田長政以後百数十年にして真に一世の偉丈夫と謂ふべきなり

金忠輔は近世の奇傑なり家登主郡石越にあり常子出で仙臺より高野東照宮の大祭あり毎に忠輔乃走せて石越に至り老又を肩ひて祭禮を令せし終つて又肩ひて家三郎ウむ石越の仙臺を距ること殆ど二十里餘而して母祭又平はの如くも懈らず仙臺東北出で四十五里一月三忠輔は其櫻田修輔の門子也遊ぶ同輩大之目鐵右衛門と暗夜迷敷の地を往きて静坐練心の術を修せんことを約し蘭を揮りて往く所少地を照む大之目西足山を厚忠輔は磐水山を厚たり翌朝大之目忠輔を訪ひて磐水西足山を厚の状を語り忠輔首肯す曰く西足山の

有様ルシナシのた」と無き忠好意の約子背きて往
かぶ家内子敷眠せり大之目六とを聴きて大ニ怒
りて史の妙絶つ曰上八百五

仙臺文庫藏書

仙臺義會雜誌第八冊三忠輔傳アリ

仙臺義會雜誌第八冊三忠輔傳アリ

